九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芭蕉俳文における長嘯子受容の背景

岡本，聡
芦屋女子短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/4741986

出版情報：雅俗. 10, pp.106-126, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

芭蕉俳文における長嘯子受容の背景

岡本聡

はじめに

芭蕉が、長嘯子の歌文の影響を顕著に受けている事は、すでに宇佐美喜三八氏[註1]、村松友次氏[註2]、松尾勝郎氏[註3]、上野洋三氏[註4]など先学によりさまざまな角度から指摘されている。この影響関係を、創作年次順に検討してみると、元禄二年（一六八九芭蕉四十六歳）以後、元禄六年（一六九三）までのわずか五年程の間に集中的にその影響が看取される。これについて、宇佐美喜三八氏は次のように述べている。[註5]

元禄二年の末から元禄四年にかけて芭蕉の念頭には「挙白集」の歌文の浮ぶことがあったと見られるのである。

また、松尾勝郎氏も次のように述べている。

弱冠のころから馴染み親しんだ長嘯子の世界を、四十六歳を迎えた元禄二年の時点で改めて強く意識した表徴とも受けとめ得る「長嘯の墓もめぐるか」の吟詠は、元禄期に入ってからの芭蕉が長嘯子に深い関心を示した事例の明白な証左といえよう。

本稿では、以上の先学の指摘をもとに、『挙白集』の影響を受けたとされる芭蕉が弱冠の頃から馴染んでいたとされている『挙白集』に四十六歳を過ぎた元禄二年以後、集中的にその影響を受け始める理由について考察していく。

従来の指摘を検討すると、芭蕉がその俳文を確立したとされる元禄三年成立の『幻住庵記』と元禄二年の旅を描いた『奥の細道』に顕著な長嘯子からの影響が看取される。また、松尾勝郎氏は、それ以前の貞享三年秋かとされる『四山の瓢』に関しても長嘯子からの影響を指摘する。

ところで、『四山の瓢』『幻住庵記』『奥の細道』において先学により典拠とされてきた『挙白集』の巻数と題名を示すと次のように一つの顕著な傾向を示している事に気付く。『四山の瓢』については、前掲松尾氏論文、また、『幻住庵記』『奥の細道』については、松尾氏論文の他、前掲宇佐美氏、村松氏の論文を参照されたい。

『四山の瓢』（貞享三年）

(1)『挙白集』巻十「曳尾」
『挙白集』巻十「心戒」
『挙白集』巻十「はちたゝき」

(2)『挙白集』巻十「はちたゝき」

(3)『挙白集』巻十「曳尾」
『挙白集』巻十「心戒」

『幻住庵記』（元禄三年）

(4)『挙白集』巻六「（東山）山家記」

(5)『挙白集』巻六「（東山）山家記」
『挙白集』巻六「（西山）山家記」

(6)『挙白集』巻六「（西山）山家記」

(7)『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
(8)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」
(9)『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
(10)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」
(11)『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
(12)『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
(13)『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
(14)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」
『挙白集』巻六「(東山) 山家記」
『挙白集』巻六「あさぼらけ」
(15)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」
『挙白集』巻六「後瀬山」
(16)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」
(17)『挙白集』巻六「(西山) 山家記」

『奥の細道』(元禄五年)

(18)『挙白集』巻七「ある人のもとにつかはす消息」
(19)『挙白集』巻八「筑前中納言秀秋卿餞別」
(20)『挙白集』巻八「叡山にまうでられけることば」
(21)『挙白集』巻八「妙寿院をいためることば」
(22)『挙白集』巻八「はじめてあづまにいきける道の記」

(23)『挙白集』巻八「はじめてあづまにいきける道の記」
(24)『挙白集』巻八「九州の道の記」

(19)の「筑前中納言秀秋卿餞別」についてのみは、前掲論文ではなく、今回新たに付け加えたものである（傍線・波線・点線、岡本）。

『奥の細道』

前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく

行春や鳥啼魚の目ハ泪

『挙白集』巻八「筑前中納言秀秋卿餞別」

しかるを今我長途のうれへ有。羽のおれ輪のかけたるがごとくにしてちまたにまよふこゝろたへず、雲路にむせぶおもひふかし。（中略）こゝに感じて、羈旅千里のおもひをのべて

どちらも、離別の場面なのであるが、ここでも、表現が三カ所に渡って重なっている事が指摘出来る。

これらの出典の中には、まだ検討を要するものがあるとしても、少なくとも『四山の瓢』を書く折には、芭蕉の傍らには、『挙白集』巻十が置かれ、『幻住庵記』を執筆する折には、巻六が置かれ、『奥の細道』執筆の折には、巻八が置かれていたと考えて良いものと思われる。このようにそれぞれの巻を連続して使用している状態から推測すると、芭蕉には、執筆時あるいは改訂時に、『挙白集』を傍らにおいての作業があったものと推測出来るからである。そしてこの場合、「記」の文章を書く参考に「記」の文章が集まる巻六を、紀行文を書く時には「道の記」が集まる巻八を、「玩物」の文章を書く場合には、「玩物」の文章が集まる巻十をそれぞれ参照したのだと想像出来る。

それでは、元禄前後から、芭蕉が、それ以前から目に触れていたと考えられる『挙白集』をかくも多くその俳文に受容しているのはなぜであろうか。また、特に、『幻住庵記』の典拠が両「山家記」に集中しているのはなぜであろうか。

二　定為『山家の記』と『幻住庵記』

以前拙稿[註6]において、長嘯子門安藤定為『山家の記』における『挙白集』の両「山家記」受容について述べた。この定為のものは、定為が長嘯子の弟子である事からしても、その題名からしても、明らかに長嘯子の両「山家記」を受容しているものと考えられる。この定為『山家の記』が成立したのは貞享三年四月三日夜、すなわち『幻住庵記』が成立する五年前の事である。ところで、両者が典拠にした『挙白集』中の歌文の受容の仕方については着目すべき相似が見られる。

安藤定為[註7]『山家の記』

「（東山）山家記」　11例
「（西山）山家記」　8例
「あさぼらけ」　1例

芭蕉「幻住庵記」（第五稿まですべてを含む）

「（東山）山家記」　9例
「（西山）山家記」　7例
「あさぼらけ」　1例
（※「後瀬山」　1例「（西山）山家記」にも典拠を指摘、右記に含む）

「後瀬山」を典拠にしている『幻住庵記』『猿蓑』所収本の用例「先たのむ椎の木もあり夏木立」が、同時に「（西山）山家記」をも典拠と指摘されている事を考え、これを例外的にみなせば、長嘯子の両「山家記」及び、同じく隠棲生活を描いた「あさぼらけ」という三作品を、同じ様に受容して一つの作品に仕上げているのである。これ以前に、長嘯子の両「山家記」や「あさぼらけ」を同じように受容し一つの作品としている歌文や俳文は見つからず着目すべき事であると気付く。

更に、典拠としている部分も次のように重なっている事が指摘出来る。

『幻住庵記』芭蕉文考稿の「灯をか、げては景を伴ひ」という部分は、遡れば『徒然草』を典拠としている。定為は、典拠となった『徒然草』の「ひとり灯のもとに」に続く「文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞ」を受容して次のように記している。

文をひらき見ぬ世の人にまじはり、むまれぬ時のよしあしをかふがへ、しらぬさかひのうみ山にさまよひなどつれづれわぶる事をしらず

これは必ずしも、「灯をか、げて」に結びつかないとも考えられるが、明らかに『徒然草』の同じ部分を典拠として用いており、両者がともに「(東山) 山家記」の「灯をか、げつくして」に結びついているという点では、ここに挙げるべきであろう。

同じく芭蕉文考稿の次の表現にあたるものも、定為『山家の記』に存在する。芭蕉文考稿を二つの部分に分けてその左に定為『山家の記』を記す。

「昼は里の年寄・神主など来りて」

東光寺浄泉庵主は、よるひるとなくきたりて暮うちものがたりす。

「水汲、茶を煮る程の力をくはふ」

茶室をかまへ、その具をたくはふ、湯のにゆるおと～

「茶を煮る」に関しては『挙白集』の「あさぼらけ」にも「おち葉のちりつもれるをかいあつめて茶をぞにるめる」という表現が見られる。後述する人見竹洞の詩文にも「(東山) 山家記」と重なる「琴を撫で」という記述の直後に、「茶を烹る」という表現が備わる。

米沢家本『国分山幻住庵記』の「山はさすがに深からず。人家能ほどにへだゝり」も「(東山) 山家記」の「山はさすがにふかゝらねどあらはならず」を受容したものとされる。それをひっくり返した表現で定為『山家の記』には次のように記されている。

山里めかずうるさけれど、城市のいそがはしかなるをおもひやるにつけて、翁が心しづかに世のにごりのがれしよろこびをすゝむる媒とかへりてうれしきものにながめなしぬ。

『猿蓑』所収本冒頭部「石山の奥、岩間のうしろに山有。国分山と云」という部分が、「(西山) 山家記」冒頭部「小塩山の麓に蘭若あり。勝持寺とかける道風が額あざやかなり」に相通じるという事が宇佐美氏に指摘されている。定為『山家の記』冒頭部は、次のようになっており、やはり「(西山) 山家記」と相通じるものがある。

千年山のふもと抱琴園はおほぢ始てかくれすませ給ふ所にして～

『猿蓑』所収本の「あるじの僧何がし」は先にも引いた定為の「東光寺浄泉庵主は～」という部分が該当しよう。

『猿蓑』所収本の「猿の腰掛と名付」は「(東山) 山家記」では、「やがて爰を半日とす」や「爰を寄亭とす」にあたるものであろう。定為『山家の記』においては次の部分が該当する。

こなたの軒に阿誰（自筆本では「猗翠」）の字をかけて茶室をかまへ

これについては、前掲拙稿で述べたように、定為自筆本にある朱筆訂正は、長嘯子の「寄亭」の由来を意識したと考えられる「猗翠」となっている。

『猿蓑』所収本「木曽の桧笠、越の菅簑計枕の上の柱に懸たり」は「(東山) 山家記」の「この外てうどめく物かならずもとむとなけれど、おのづから琴一張、からの文づくゑひとつ、おなじうすゞりのさまもゆゑなからずえりなして」を受けたものと指摘されている。定為『山家の記』では、次の部分がこれに該当しよう。

たくはふるもの、琵琶、琴をの〳〵ひとつ、笛はいきともしくなりてえしもふかねど、すがたのめでたければうちもやらず、ふばこ、囲碁のばん、からやまとのうつし絵一はこ、皆かすかなるすまゐの友とうとまれず

『猿蓑』所収本「昼は稀〳〵とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のおのこ共に入来りて、いのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談」に該当するものは、先述した「東光寺浄泉庵主はよるひるとなく来りて碁うちものがたりす」であろう。

こうして見てくると、『幻住庵記』で長嘯子と表現の上で重なると指摘されている全十四例の内、八例について定為『山家の記』にもその該当箇所を見いだす事が出来るのである。

『幻住庵記』に限定せず、その枠をもう少し広げるなら、『嵯峨日記』の記述「舎中の片隅一間なる処伏処と定ム。机一、硯、文庫、白氏集、本朝一人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置」は、「琵琶、琴をの〳〵ひとつ〳〵」という先の定為の文脈と重なるし、『其便』（元禄六年）の「芹焼やすそわの田井の初氷」についても定為『山家の記』に「あるひはすそはの田井にねせりをつみ」という表現が存する。ただし、これについては『方丈記』に「あるひはすそわの田ゐにいたりて落穂を拾ひて」という文が備わっている。

また、三者には共通して次の表現が備わっている事も指摘出来る。

「（東山）山家記」

ひつじさるのかたにちいさくてたてる庵あり。

定為『山家の記』

ひつじさるのかた一里ばかりに（中略）亀山の城なり。

『幻住庵記』第二稿

牛の尾・日野山は未申（ひつじさる）の方にあたれり。

『幻住庵記』第五稿

山は未申（ひつじさる）にそばだち

これについても「ひつじさる」という言葉のみにこだわれば、「西南（ひつじさる）に竹の吊棚を構へて」という表現が『方丈記』にも備わっている。

着目すべきは、『幻住庵記』と定為『山家の記』の表現の方がより近いものが存する事である。次の二例が、長嘯子の両「山家記」に比して、定為『山家の記』とより表現が近い例である。

○『幻住庵記』第四稿第五稿

南薫峰よりおろし、北風海をひたして涼し

定為『山家の記』

西には瑞岩の山おろしはげしくて、主人公をよびさまし、千年川水たえずしてゆくものはかくのごとしとさとりぬ。北に竹のはやしみどりをふかめて

○『幻住庵記』第三稿、第四稿、第五稿

山居といひ旅寝といひさせる器たくはふべくもあらずなん侍れば、木曽の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕上の柱に掛けたり。

定為『山家の記』

たくはふるもの琵琶、琴おの〳〵ひとつ

前者は、両「山家記」には見られない。「西には」「北に」という部分が「南薫」「北風」に、「山」「川」の対比が、「山」「海」の対比に、「瑞岩の山おろしはげしくて」が「南薫峰よりおろし」にそれぞれ該当している。

また、後者は、玩物の記述で、「(東山) 山家記」にも該当個所がある訳だが、「(東山) 山家記」にはない「たくはふるもの」という表現を用いている事で、より表現が似通っていると言えよう。「たくはふる」という表現について、前掲村松氏稿では、「(東山) 山家記」の「てうどめく物かならずもとむとなけれど」が「さる器たくはふべくもなし」に影響を与えているのではないかと指摘している。この部分は米沢家本では「たくはふべくもあらず」となっており、芭蕉文考稿所収本では「たくはふべくもあらずなん侍れば」となっている。しかし、長嘯子の両「山家記」には「たくはふ」という表現は使われていないのである。

以上の二例が、両「山家記」に比して、定為『山家の記』の方が、より表現が近いと言い得るものである。

このように見てくると、芭蕉『幻住庵記』と定為『山家の記』とは単に「記」の文学の伝統にのっとって書かれていると

か、両者とも『挙白集』の両「山家記」を受容しているから似ているという以上に、何らかの影響関係を有しているのではないかという事さえも疑われてくる。

三　安藤定為と北向雲竹、雲竹と芭蕉

芭蕉は、写本でしか流布していないはずである定為『山家の記』を目にする可能性があったのだろうか。これを検討するにあたり、まず芭蕉と定為との接点を探ってみたい。貞享三年四月三日夜に書かれたとされる定為『山家の記』の中に次の一文が備わっている（傍線岡本）。

よものかべに靖節先生帰隠の図をみづからうつし、そのことばを雲竹子にかゝしむ。

ここに出てくる「雲竹子」とは京都洛北極楽尼寺に住していたという大師流の書家北向雲竹で、芭蕉は書を貞享の末年その門に学んだという説がある（岡田利兵衛氏[註8]『芭蕉の書と画』）。実際雲竹は『幻住庵記』最終稿の収録されている『猿蓑』の其角序文の版下筆者であり、その弟子正竹が『猿蓑』本文の版下を書いているのであるから、『幻住庵記』とも関わりが深い人物なのである。元禄四年五月に書かれた『猿蓑』其角序文には「元禄辛未歳五月下弦雲竹書」とある。

更に『幻住庵記』には、次のような記述がある。

ある人をして額を乞。いとやすゝと筆を染て幻住庵の三字を送らる。

新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（小学館）の校注では、この「ある人」を「京の書家北向雲竹か」とする（村松友次氏校訂）。田中善信氏[註9]「芭蕉と雲竹」も、「ある人を雲竹に擬することはあながち妄説とは言えまいと思う」としている。たしかに、これについては、この前後の両者の交流関係から推すると充分首肯出来る事である。すると、定為と芭蕉とは同じ人物に額を乞うているという事になるのである。ただし、芭蕉の方は、その「ある人」を通じて、雲竹にとっても師匠筋にあたるとされる藤木敦直の息、寂源僧正に額を乞うている事が、田中氏前掲論文に指摘されている。

雲竹と芭蕉との関係を現在判明する限り、定為『山家の記』や『幻住庵記』とからめて年譜にすると次のようになるだろう（傍線、波線岡本）。

貞享三年（一六八六）四月三日夜

安藤定為『山家の記』が書かれる。雲竹が登場する。

貞享末年頃（一六八七）

この頃、芭蕉の書風が雲竹風になったとする説がある。（岡田利兵衛氏『芭蕉の書と画』）

元禄元年（一六八八）四月二十六日

芭蕉は北向雲竹を訪い、大和今市の孝女伊麻のことなど語る。（今栄蔵氏[註10]『芭蕉年譜大成』、その典拠は雲竹筆「伊麻女画像賛」）

雲竹はすぐに弟子の友竹に伊麻の姿を写しに行かせ、その絵に賛を書く。（伴高蹊[註11]『近世畸人伝』）

元禄二年（一六八九）

十二月の「長嘯の墓もめぐるかはちたゝき」以後、元禄四年にかけて芭蕉の念頭には『挙白集』の浮かぶ事があったという指摘がある。（宇佐美喜三八氏[註1]「芭蕉と『挙白集』」松尾勝郎氏[註2]「元禄期芭蕉俳文と『挙白集』」）

元禄三年（一六九〇）七月中

京の北向雲竹、自画像を送って芭蕉に賛を求める（『笈日記』に幻住庵在庵中とする。芭蕉の句は「こちらむけ我もさびしき秋の暮」である）。（今栄蔵氏『芭蕉年譜大成』）（「雲竹の賛」）

芭蕉『幻住庵記』この頃執筆される。

元禄四年（一六九一）五月

芭蕉『幻住庵記』最終稿を含む『猿蓑』の其角序文の版下が雲竹により書かれる。本文版下は、雲竹の弟子正竹。（版本『猿蓑』序文）

『幻住庵記』中、「ある人をして額を乞」と記述される「ある人」とは北向雲竹を指すか。

（村松友次氏　新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（小学館）・田中善信氏「芭蕉と雲竹」）

△元禄七年（一六九四）（今栄蔵氏よりの御教示に拠れば、この元になる資料は偽書かとされる。）

既成の雲竹画に芭蕉が賛を加えたらしいものが伝わる。

（岡田利兵衛氏『芭蕉の書と画』）

芭蕉句は元禄七年の歳旦句「蓬莱にきかばや伊勢のはつ便」。

（田中善信氏「芭蕉と雲竹」）

以上が、現在判明し得る芭蕉と雲竹との交流を示すすべての資料であると言えよう。着目されるのは、存疑とされている元禄七年の画賛を除くと、芭蕉が長嘯子の影響を顕著に受け始めたとされる元禄二年前後の数年に雲竹との交流は集中しているのである。また、『幻住庵記』最終稿を含む『猿蓑』の其角序文版下は雲竹自身が書いている事も見逃せない。

定為は文中に登場させるからには、雲竹に『山家の記』を見せていたであろうし、更にそれについて雲竹は芭蕉に語ったか、あるいはその写しを見せたという可能性も考えられる。逆に言えば、その事がなければ、全く接触のない別人物の手で、それほど時間を隔てずにほぼ同じ様に長嘯子の両「山家記」及び「あさぼらけ」を受容して一文にするという事が行われていた可能性を想定しなければならない。しかし、この雲竹という人物を介在させる限り、芭蕉が定為『山家の記』に関する何らかの情報を得ていた可能性を完全に否定しさる事は出来ないであろう。

四　まとめ

安藤定為と芭蕉を結びつける、いま一つの可能性を指摘して本稿を終えたい。それは、深川芭蕉庵における、山口素堂を介しての、人見竹洞との関係である。この事については堀信夫氏に「素堂と江戸の儒者」[註12]があり、これを踏まえた大庭卓也氏の「水竹深処」[註13]考――人見竹洞の別墅と江戸詩壇――」がある。これらの論考によると、竹洞の庵と芭蕉庵及び素堂の庵はごく近所にあり、互いに交流があった様である。竹洞は水戸光圀の儒学の師である人見朴幽の甥であり、朴幽もこの竹

洞の深川の庵に訪ねている（竹洞自身光圀とは四十五年に渡る深い交流がある）。また、安藤定為と、人見朴幽とは旧知の仲であったろうと考えられる。正保三年（一六四六）、水戸光圀が冷泉為景のもとへ本を探しに来た折には、朴幽はその使者となっており、定為はまさに同年に慈光寺冬仲とともに為景の門人になっているからである。また、定為の父定明は藤原惺窩（冷泉為景の実父）門人、人見朴幽は林羅山門人（惺窩門人）であるから、それ以前からのつながりがあったとも考えられる。[註14]人見氏は竹洞の四代前の道嘉まで、細川晴元に仕えて定為と同郷の丹波国馬路に居住していた。次の代の道西は、戦乱の中、嵯峨野の天竜寺の策彦周良を頼って落ちのびたとされる。定為の末裔、安藤宏氏のご教示に拠ると、[註15]人見家、中川家はともに丹波国馬路の郷士として続いている家柄であるから、竹洞の代にもその縁者がいたであろうと考えられる。いずれにせよ、この正保三年の時点で朴幽と定為に面識があったであろう事が指摘できる。すると、芭蕉は朴幽の甥竹洞から山口素堂経由で、長嘯子門安藤定為の事をすでに聞き知っていた可能性がある。

いま一つ定為と、芭蕉とつながりを持つ竹洞を間接的に結びつける人物がいる。それは、竹洞の琴の師匠であったと大庭卓也氏前掲論文に紹介されている[註16]東皐心越である。[註17]渡辺刀水氏「安藤素軒と年山」に述べられているように、元禄六年（一六九二）三月に定為は亀岡の抱琴園の前にある[註18]東光寺の鐘銘を書いている。この鐘銘は東皐心越の作する所のものであるとされる。ただし、定為の元禄十年から元禄十一年にかけて水戸へ下った折の紀行文『ひたち帯』下に、定為が天徳寺を訪れた折、東皐心越に会いたいと思っていたがかなわず亡くなって三年になるとあるので、その関係は間接的なものであったと考えられよう。[註19]稗田浩雄氏は、竹洞に東皐心越の琴譜を託された杉浦琴川について、元禄十一年定為の隠棲していた桑田郡へ采地が移されており、定為との交流が推測されると指摘している。

更に言えば、竹洞自身直接定為と面識がある可能性がある。竹洞が将軍家綱の近侍として仕えていたのは竹洞九歳の正保二年（一六四五）からであり、寛文元年（一六六一）には、幕府の儒者となり、侍講として年俸三百俵を給付されている。一方定為がその後見役となっていた伏見宮貞清の娘（定為が、京都所司代板倉から幕府を動かし伏見宮家を継承させた貞致親王の姉、定為の従姉妹少納言局の娘）が家綱の御台所に決まったのは明暦三年（一六五七）夏である。以後定為は毎年決

まって、年頭には江戸へ赴き家綱と御台所に拝謁している訳であるから、少なくとも明暦三年から延宝四年（一六七六）までの二十年間に渡り、近侍あるいは侍講として仕えている竹洞と直接顔をあわせていたと考えられる。加えて先述したそれ以前の定為と朴幽のつながり、あるいはその後の両者の心越禅師との交流をも考慮に入れるならば、竹洞が定為を直接に知り得ていた事は充分に考えられる。少くとも竹洞が定為を全く知らないという事はあり得ないのである。

『続猿蓑』巻下に示されるように、素堂が竹洞から素琴を贈られ「うるしせぬ琴やつくらぬ菊の友」と詠じた事について大庭氏は「心越の衣鉢を継いで琴道に通じていた竹洞を敬慕していたからに他ならない」としている。この琴に対する志向は、もとは勿論陶淵明の「無弦の琴」の風雅に通じる文人趣味に端を発したものであろう。これに関連して、先述した稗田[註20]浩雄氏が、琴学の系譜として、心越禅師と定為、心越禅師と竹洞との関係についてそれぞれ論及している。

大庭氏紹介の竹洞の自撰詩文集『葛東題葉録』（『竹洞先生詩文集』巻之二十　汲古書院　平成三年五月）にも次のようにある（漢字を通行のものに改め、訓読傍線を付した）。

（前略）葛東水竹深處に遊び、坐すれば則ち書を読み、琴を撫で、筆を弄し、香を焚き、几に憑り、茶を烹る（後略）。

竹洞の描くこの文人的生活は、長嘯子、定為、芭蕉が共通して備えている隠者的文人趣味であろう。少なくとも、長嘯子、定為、竹洞、其角には、共通して陶淵明の「無弦の琴」を受容した記述が備わっているのである。

また、日野龍夫氏の[註21]「近世前期の江戸詩壇」に竹洞の「陶蟾仙伝」という万治元年（竹洞二十二歳）以前の戯文が紹介されている。この中で主人公の陶姓が陶淵明に通じる事から、淵明「飲酒」其の八の一句「東軒の下に嘯傲す」によって架空の対話相手を「嘯傲子」と命名したのだろうという事が指摘されている。これについても、貞享三年四月成立の定為『山家の記』にも同じ箇所を受容し、自らの庵の名としている事が知られる（安藤家蔵定為自筆本に拠る。括弧内は、朱筆に拠る書き入れ部分）。

此ひだりにつゞきたる軒端に、嘯傲のもじをかゝげて、堂の名とし、東軒のもとにといふ詩（淵明ノ詩）を書つく。みな玄賢長老の筆なり。

また、定為がそれ以前から、陶淵明の詩に親しんでいた事は、同記中の次の記述から窺える。

殊に先生（靖節也）の集は、むかしよりめなれて、其みさほゆかしければ、必これをよむ。よむごとに、あぢはひますくながうして、翁がおもむきにかなひたれば、先生と翁と世をことにする事をわすれて、身をあはせたるをおぼふ。

この「嘯傲子」という架空の対話相手を定為に仮託する事が出来れば、竹洞と定為が直接交流があった根拠となる。堂の名に「嘯傲」と付けたのならば、定為が、それを号としてそれ以前にも使用していた可能性はあり、竹洞が「嘯傲子」と呼んでもおかしくないからである。定為が堂の名を「嘯傲」（自由で拘束されない事）としたのは、隠者としての陶淵明を強烈に意識したと同時に師である「長嘯」をも意識し、同時代隠者の石川丈山の号「嘯月樓」をも意識したものかと考えられる。先述したように、定為と竹洞は、明暦三年（一六五七、定為三十一歳、竹洞二十一歳）から、二十年間に渡り年一回は顔をあわせているはずである。するとこの竹洞の戯文を受けて程なく書かれたと考えられる読耕斎の文が「万治元年作」（一六五八）とされるわけであるから、ちょうど定為と知りあった可能性のある年か、その翌年に竹洞の戯文は書かれたものと推定し得るのである。しかし、顔をあわせてはいても、そこに直接の交流があったという確証がなく、定為が隠棲して『山家の記』を書いたのは、かなり後の事になるので、この事を論証する事は出来ない。ただ、先述したように、竹洞は家綱の侍講、定為は家綱の御台所の後見人であるから、両者に強い陶淵明への関心があるという事にはやはり注意を向ける必要があろう。日野氏前掲論文において、当時の林家を中心とする江戸詩壇（羅山、読耕斎、竹洞、梅洞など）に『荘子』や陶淵明が庶幾されていた事が指摘されている。また、日野氏はこれを、当時の京都の詩壇には見られない雰囲気であった事を指摘した上で、「幕府によって儒林における地位を保証された人々の、意識の贅沢、外的に恵まれているがゆえのあき足りぬ思い、反現実志向」とする。言い方を換えれば、定為の陶淵明を庶幾する隠逸志向もまた、その林家を中心とする江戸詩壇の雰囲気の中にあったという事になろう。

また、長嘯子→野間三竹→竹洞→素堂→芭蕉→其角という隠逸志向の系譜[註22]だけは間違いなくその影響関係を指摘出来る。そして、定為と竹洞が先述したように直接に知り得ていた可能性があるとすれば、長嘯子→定為→竹洞という影響関係もあ

り得たかも知れない。大庭氏は前掲論文において竹洞の弟人見必大が其角[註23]に親炙した人物であり、その長男の午寂こと人見元浩が其角門にあって江戸座俳諧の中軸であった事をも指摘している。すなわち、竹洞の隠逸志向が、其角や芭蕉に影響を与える素地は充分にあるのである。

竹洞が、長嘯子の周辺人物でもある野間三竹と交流がある事は森銑[註24]三氏に紹介されている。その中には『竹洞全集』[註25]を根拠に寛文六年（一六六六）十二月十一日に、野間三竹が人見竹洞を訪問し、知己である長嘯子、石川丈山、角倉素庵などの隠逸について語っている事が記されている。『石川丈山年譜　本編』[註26]を参照すると、これより以前万治元年十一月二十三日の項に「人見竹洞、野間三竹来訪す」という事が林鵞峰の十二月十四日付の丈山宛書簡を根拠に記載されている。これについて同年譜は「三竹と竹洞との交際は、この詩仙堂での偶然の出会いから始まったということになるであろう」と記している。ここに長嘯子の周辺人物である石川丈山と竹洞との交流も確認される。

また、三竹が寛文元年（一六六一）、唐土の隠逸の伝を集めた『古今逸士伝』には竹洞の序文が付されている。すなわち、三竹と竹洞の交流は、万治元年十一月二十三日から確認でき、それ以後の交わりは、「隠逸」という共通の嗜好を介したものだったと考えられるのである。つまり、竹洞は長嘯子と縁のある人物と定為と知りあったと考えられる万治元年頃から、さまざまな形でつながりを持っていたという事になるのである。

更に『竹洞先生詩文集』（汲古書院　平成三年五月）解説に拠ると、豊後日出藩の木下俊長（日出藩三代当主　寛文元年六月十三日遺領二万五千石を相続。父俊治、祖父延俊はともに細川幽斎の娘を正室とする）は特に竹洞を慕い、藩の子弟教育を委嘱したようである。豊後日出藩とは、長嘯子から数えて三番目の弟延俊の城であり（慶長六年三万石にてこの日出の城を領す）、末弟某（出雲守、号宗連）も寛永七年以後は延俊のもとに寄食し、その子孫はこの家の家臣となっているのであるから、長嘯子とは関わりの深い藩なのである。『長嘯子新集』中巻に紹介される『東山集』（吉田幸一氏蔵本）という資料は、もともとこの日出の地で、万治二年十月二十八日に長嘯子の末弟宗連が長嘯子の文集を上下二帖に書写したものを寛文延宝頃転写したものであるとされ、ここには、三十八篇の長嘯子の和文が収められている。

ところで、安藤為章の『年山紀聞』中の「隠士朴翁に贈ること葉」に、光圀が、定為の先祖惟翁の『八境の記』を以前から所持していた事が見え、それを定為に会って善本を見せてもらう事が出来、誤りを訂正する事が出来た事を喜んでいる記述がある。隠者好きの光圀が好んでいたという伏見宮から臣籍降下して亀岡に下り安藤家の祖となった惟翁は、長嘯子や芭蕉にとって、あるいは三竹や竹洞にとっても、隠者の先蹤として心惹かれる存在だったのではなかろうか。惟翁が元亀元年（一五七〇）以前に書いた『八境の記』には、千年山尾口村の八境として次のものが描かれている（本文は定為自筆本『八境の記』冒頭部）。

千年山尾口村ノ八境

嘯月岩　山上ニアリ
洗耳泉　山中ニアリ
管雲洞　山中ニアリ、管は管領ノ意ナルベシ
愛蓮塘　東光寺ノ前ノ池ニ昔ハ蓮アリシトゾ
吟雪橋　村中ニアリ、今ノ谷川筋、昔ハ水フトクテ柴橋アリシトゾ
賞竹径　村中ニアリ、今ノ南町ノ内也、今ハ人家ト成タリ
嗅梅塢　村中ニアリ、是モ南町ノ内也、塢ハツヽミトヨム
抱琴園　東光寺ノ下也、俗ニ栗林ト云テ今ハ栗ノ木アリ

これらは長嘯子の「（東山）山家記」に見られる「半日」や「寄亭」あるいは「独笑」に通じるおもむきがあるし、芭蕉の場合で言えば「猿の腰掛」など、身近な景物に名前を付けていく下りに通じるものが感じられる。

光圀が以前から所持し、それに親しんでいたという事は、惟翁の『八境の記』は隠者文学に心を寄せる朴幽・竹洞などの光圀周辺の人々にとってもその存在が知られていたものと考えられよう。

芭蕉が人見朴幽、竹洞、山口素堂経由で、長嘯子に先んずる隠者であり『八境の記』を著した惟翁についても知り、その

惟翁の末裔で、しかも近世期隠者の先駆長嘯子の弟子でもある安藤定為の事を伝え聞いていた可能性は考え得る。特に、元禄初年頃、俳文確立を模索していた時期の芭蕉にとって、和文の一大集成を目的としていた水戸家の『扶桑拾葉集』編纂には関心があったであろうし、貞享三年から元禄六年までの編纂に関わっていたのは安藤定為の息、為実なのである。また、こうした水戸家の情報は、ある程度は朴幽→竹洞→素堂経由で、あるいは板垣宗憺[註28]→原安適経由で入ってきていたものと考えてもよかろう。その定為と直接交流がある北向雲竹と、芭蕉が元禄元年（一六八八）四月二十六日に接触した折、その前々年に伏見宮家を致仕し、亀岡に隠棲して、長嘯子の両「山家記」を受容して「山家の記」を書いていた定為の事を、雲竹自らも、その「山家の記」中に記載されていることから考え、話題に出した可能性は高いと考える。芭蕉と雲竹のこの四月二十六日の面会の折の逸話が、近世中期の資料ではあるが、伴蒿蹊の『近世畸人伝』「大和伊麻子」の項に次のように記載されている（本文は『近世畸人伝・続近世畸人伝』（宗政五十緒校注　平凡社　昭和四七年一月刊））。

> 大和の国葛下郡竹内村に寡婦あり、伊麻といふ。（中略）芭蕉翁桃青、貞享五年四月に、大和路を行脚のついでに聞て、涙とゞめがたかりしと、やがて京に来りて、書家雲竹に語る。雲竹もまた感ずるの余りに、みづから大和に往てその婦にまみえんとせるを、門人友竹為に代てゆき、其姿を写し来れりと、即雲竹其画像の上に自筆にて記せり。同じ年八月既望とあり。芭蕉、雲竹ともに聞ゆる人にして、見聞のたしかなる証かくのごとし（後略）。

これは、雲竹筆「伊麻女画像賛」の成立時の事と考えられ、信憑性のある記述として良かろう。これに拠ると、芭蕉は、大和伊麻に元禄元年四月に会い、その直後の二十六日に京都に出て、この事を雲竹に語っているようである。それだけ、この時期の芭蕉と雲竹との情報伝達が密であった様子がこの逸話から窺える。雲竹はその話に感動して、弟子の友竹に代理でその姿を写しに行かせ、そこに賛を記しているのである。

この逸話から類推すると、芭蕉が雲竹に「大和伊麻子」の情報をもたらしたのと同様にこの前後、逆に雲竹が芭蕉に、ちょうど二年前（貞享三年四月）に成立している定為『山家の記』の情報をもたらした可能性は充分に考えられるのである。雲竹が元禄四年に『幻住庵記』が収録される『猿蓑』の其角序文の版下を書き、本文を弟子の正竹に書かせているという事実

は、この逸話を見て改めて振り返ると決して意味がない事とは考えられない。これについても、雲竹が定為『山家の記』の情報を芭蕉にもたらした為、その縁からその版下書きを弟子と二人で行ったものとも考えられるのである。

芭蕉が元禄頃から急に長嘯子を受容し始めた背景には、この雲竹との出会い、あるいは山口素堂や其角を介した人見竹洞との交流が一つのきっかけとして存するものと考えられる。そして、いずれにしても、その背後には長嘯子門である安藤定為の姿が見え隠れしている。従来、芭蕉の長嘯子受容は、長嘯子門山本春正の門人原安適とのつながりの中で理解されてきたものと考えられる。しかし、この雲竹とのつながり、あるいは素堂や其角を介した竹洞とのつながり、またその背後の長嘯子門安藤定為の存在をも併せて考える事により、元禄以後の顕著な長嘯子受容はより明確さを増すものと考えられるのである。

註

1 「芭蕉と挙白集」（『和歌史に関する研究』若竹出版　昭和二十七年）。

2 「芭蕉俳文と挙白集」（『芭蕉の作品と伝記の研究――新資料による――』笠間書院　昭和五十二年五月）。

3 「元禄期芭蕉俳文と『挙白集』」（『芭蕉点描』有精堂　一九九一年五月）。

4 「『挙白集』と『奥の細道』」（『リポート笠間』第29号　昭和六十三年）。

5 既に指摘されている六十六例の内、貞享以前のものとされているのは、わずかに三例しか見受けられない。その中でも確実に長嘯子の影響を言う事が出来るのは、延宝六年以前とされる『江戸広小路』の「長嘯の筆きり〳〵す啼」の一例のみなのである。

6 拙稿「長嘯子門安藤定為の周辺」（『近世初期文芸』第十六号　平成十一年十二月）。定為の年譜に関しては、拙稿「安藤定為年譜稿」（『水戸史学』第五十七号　平成十四年十一月）を参照されたい。

7 芭蕉文考稿、米沢家本、『猿簑』所収本で重なっている用例を、それぞれ一例と数えた。

8 『芭蕉の書と画』（岡田利兵衛著作集Ⅰ　八木書店　平成九年）。
9 『近世文芸研究と評論』6号　昭和四十九年五月。
10 『芭蕉年譜大成』（角川書店　平成六年六月）。
11 『近世畸人伝・続近世畸人伝』（宗政五十緒校注　平凡社　昭和四十七年一月刊）。
12 井本農一博士古稀記念『俳文学の研究』（角川書店　昭和五十八年）。
13 『近世文藝』68　平成十年六月。
14 「角倉素庵略年譜」（林進氏　二〇〇二年　大和文華館図録『角倉素庵』）を参照すると、素庵の祖父吉田意庵もまた、この策彦周良に従って天文六年及び天文十六年に入明している。寛文六年十二月に野間三竹が人見竹洞を訪問した折、印象深い隠者の例として素庵をもあげているのは、竹洞の曾祖父の代のつながりをも意識したものか。
15 松田修氏「中川喜雲・ある名所記作家の場合」（『日本近世文学の成立』法政大学出版局　一九六三年十一月）に次のように記される。

　馬路村の中川氏とは、太田亮氏所引「中沢根元記」によれば、「中川の縁流なりとて、中川出羽守、同苗駿河守、人見但馬守等の武浪当所に来る。其の一流の人、今十二人、是を馬路村の郷士と定む」とあり（後略）

16 竹洞と心越との交流については、同氏に「人見竹洞と東皐心越――竹洞伝の一齣――」（『語文研究』第八十二号　平成八年十二月）という論考が備わる。
17 「安藤素軒と年山」『渡辺刀水集　二』（青裳堂書店　一九八六年）。
18 『千年山集』（口丹波史談会編　昭和六十三年八月）第一編「千年寺」の項の「鐘銘」の部に定為自身による元禄六年三月の跋文があり、その中で東光寺の鐘銘が東皐心越によるものである事が記され、また鐘銘の内容が記されている。
19 稗田浩雄氏が東洋琴学研究所のホームページ上（http://www.guqin.jp/qindou/hieda/sugiura-qinsen.htm）に心越禅師と定為、竹洞などの関係、あるいは琴学の系譜として、長嘯子や丈山と琴との関係についても述べている。

20 稗田氏は長嘯子や丈山と琴との関係についても触れ、彦根井伊家に存する長嘯子所持の黒漆無銘の琴や、定為所持の七絃琴についてそれぞれ写真入りで掲載している。恐らく彦根井伊家に伝わる長嘯子の琴は長嘯子の娘が井伊直孝室となっているので、その縁により納められたのであろう。ちなみに深草元政は正保四年まで、井伊直孝の近侍であった。

21 『宣長と秋成』（筑摩書房　昭和五十九年十月）。

22 近世前期から中期にかけての一種の「隠逸」ブームについては、井上敏幸氏「隠逸伝の盛行」（『芭蕉と元政』臨川書店　二〇〇一年三月）に論述されている。井上氏は第一世代として長嘯子、丈山、三竹を挙げ、第二世代として元政、読耕斎を挙げ、第三世代として、西鶴、芭蕉、鍋島直條を挙げている。第二世代にあたる読耕斎や竹洞が「隠逸」に極めて関心を持ち、第一世代とされる丈山や三竹と交流を持ち、隠者としての長嘯子の事を話題にしている事は着目に値する。そしてそれはまた竹洞から素堂経由で第三世代の芭蕉へとつながっていくのである。そうすると第一世代とも第三世代ともつながりを持つ、第二世代の林家を中心とした江戸詩壇の人々の「隠逸」志向というものは重要な意義を持ってこよう。

23 其角の長嘯子受容については、「其角俳文における長嘯子受容」（『国語国文』平成十四年十二月）にて詳述した。

24 「素庵角倉與一」（『森銑三著作集』第二巻　中央公論社　昭和四十六年四月）。

25 『長嘯子続集』下巻（古典文庫　昭和六十年十一月）に『竹洞全集』における、この部分の翻刻が掲載されている。

26 小川武彦、石川勇著　青裳堂書店　日本書誌学大系65（1）　平成六年九月。

27 註6　拙稿参照。

28 上野洋三氏「芭蕉と同時代の歌壇」（和歌文学講座8『近世の和歌』勉誠社　平成六年一月）に、宗川の歌会において、水戸藩儒板垣宗憺と安適が何度も同席している事が触れられている。板垣宗憺は『扶桑拾葉集』編纂にも関わっている。

〔付記〕　本稿は平成十一年十二月の大阪俳文学研究会例会の折の口頭発表に加筆訂正を施したものである。発表後さまざまなご教示を賜った方々、及び資料の閲覧をご許可賜った諸機関に心より御礼申し上げる。